

昭和二十八年九月二十日 初版印刷
昭和二十八年九月二十五日 初版發行

昭和文學全集21
石坂洋次郎集

著者 石坂洋次郎

發行者 角川源義

印刷者 柳川太郎

東京都板橋區志村町五

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロース 日本クロース工業株式會社
印刷所 凸版印刷株式會社
製本所 宮田製本所

石坂洋次郎集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

若い人（全篇）

麥死なす

女同士

解説

年譜

七

二九二

四〇〇

山本健吉

四〇七

四一〇

石坂洋次郎集

生甲斐

雪は山ほど

積りけり

洋次郎

若い人（上巻）

一

間崎が勤めてゐる女學校は米國系のキリスト教會で經營して居る自由博愛主義標榜のミツシヨンスクールであるが、基金が豊かであることと、創設以來の學長であるミス・ケートの磊落な氣象とお蔭で、宗教學校にあり勝ちな偏つた冷たい空氣もなければ、それが崩れてルースな下卑た氣風に墮することもなく、五百餘人の發育盛りの女生徒達は、やはりミス・ケートの考案になる簡素な通學服を短く著込んで、芝生と花壇の多い學園の生活をのびのびと楽しんで居るやうにみえた。

ミス・ケートは北米モンタナ州の鐵山街ビュートの産、本年五十六歳、長い握柄のついた鼻眼鏡を首に吊し、小丘のやうに盛り上がった胸の上に籠手を組み合せたやうな腕組をつくつて、始業前、晝休、放課後の三回、學校の内外を隈なく巡視する外は、大抵學長室に納まつて讀書や事務に専念して居る。毎月の第一時限に會堂で全校生徒に修身講話をするのが決つた御役目で、そのほか、月に一ぺん位の割合で各學年に臨時の時間を設けさ

せ、思索や讀書や——規律正しい日常生活の間に蓄積された感想を、美しい流暢な言葉で生徒の胸に傳達する。間崎も一度自分の受持つて居る四年B組の臨時授業を參觀させてもつた事があるが、信念の是非は別問題として、話したい内心の要求があつて教壇に立つのだから、熱意のこもつた立派な修身授業であつた。人を威壓する風貌、一抹の暗影も無い健康な精神、それらに適度な潤ひを與へる深い教養、これがやはらかい感受性をもつ生徒達をひきつけ、有形無形に學校の氣風をつくり上げて行く大きな底力となつて居ることは、無神論者の間崎といへど日頃敬服して居る所であつた。

ミス・ケートの訓育方針は「少い規則を確實に守らせる」と云ふことで、すなはち、時間、服裝、宗教上の儀式、この三項目については特に嚴格な取締りを設けてその徹底を期し、從つて生徒も小氣味いい程それらの訓練を経て居たが、その一方、學校維持費の大半を外國から仰いで居る強みがあるので、監督官廳から時々指圖される訓育施設に關する告達は大抵握り潰しにして、生徒に自由な空氣を呼吸させるやうに計つて居た。

部下の職員に要求する所も、教授法や學級管理法等の形式ばつた項目は口にも上せず、徹頭徹尾、生徒を個別に理解せよと云ふ事に重點を置き、彼女自身、僅かな臨時授業に出席するだけで、全校生徒の顔と名前をくつつ

けてよく記憶して居る點では、毎日授業に出る職員谁也及ばない程であつた。

間崎はミス・ケートの信念を教育的に正しいものと思つた。個性助長とか個別指導とか云ふ概念は教育界の流行語となつて居たが、それをほんとに生かして行くためには百の議論よりも一の信念を必要とする。ミス・ケートにはそれがあつた。もちろん、學校は多數を教育する機關である以上、個性尊重の立場に溺れて、生々しい性格の林の中に踏み迷ひ、全體としての正しい方向を見失ふやうな結果に對しては警戒をしなければならぬが、多すぎる生徒と少な過ぎる職員との比率は、實際的にはそんな危険があり得ないことを明かに示して居た。

間崎は自分の勤めに喜びを感じた。赴任當初は、年頃の女生徒に接するのが面はよくてならなかつたが、二年餘も経つた今日では、自分の知識や感情を適度にパラフレースして、繊細な感度をもつ少女達の精神を明い淡泊な色調に塗り上げていくことに靜かな愉悅を感じるほどのゆとりを持つことが出來た。

間崎は自分が若い男性である故に無條件に生徒達から好意を寄せられて居ることを知つて居たが、それを濫用し、それに溺れることさへ慎めば、與へられたハンデキャップは女生徒を指導する上に得難い天與の一資格である事を純粹に信じて居た。素朴的な性の牽引は父と娘の關係に於てさへ白極光のやうに美

しい。溺れることと共に、人生を華やかな曲線で執縛するこの牽引力を反動的に冷却させる事をも深く恥ぢよ。

六月のある金曜日の午後、間崎は、「悪魔の室」と諧謔的に呼ばれて居る喫煙室に籠つて、五年級の作文に朱筆を加へて居た。それは天井ばかりがむやみに高い一間半に二間の穴藏を思はせるやうな室で、中央に古びた長テーブル、それを圍む四五脚の椅子のほかには花も額もない殺風景な場所だつた。

南向きの窓からさしこむ陽はテーブルの面を半分だけ明るく照して居た。使用中は、煙草の煙が廊下に流れ出るのを防ぐためにドアの開放を嚴禁してあるので、たださへ窮屈な室の中は蒸されるやうな暑さだつた。生徒達は正午から郊外散歩に出かけて留守だつた。校舎の中は森閑とひそまつて、裏の松林で鳴く油蟬が、濁つた餘韻の無い響を乾燥した空中にベルトのやうに吐き出して居た。

間崎は、じつとり汗ばんでやけに煙草を吸ひながら、一枚一枚、味氣なく仕事を片づけていつた。同一課題の未熟な文章を百五十名分も調べ上げなければならぬのだから、一般に作文と云ふ學科は教師の側にはあまり歡迎されないものになつて居るが、間崎の経験によると、この學科は、教授者の課題の選び方及び課題解説の成功不成功によつてその時の成績の水準が著しく變動し、よく出来た場合には他の學科にみられない濃刺とした面

白味を感じ得ることが出来る。なんと云ふか、みづみづしい感情思索の萬華鏡を覗くといつたやうな楽しい満ち足りた氣持なのだ。その反對もひどいが――。

間崎は何回目かの苦しい欠伸を洩らして、たうとうペンを捨てた。そして、疲れた涙の目を、たつた一輪だけ窓の高さにビヨロ長く伸びた眞紅の牡丹に注いで、自分の肉體と精神を漠然と憎惡する感情の中に沈んだ。甲の評點を與へられる文章が今まで讀んだ分には一篇も出てこない。課題は「雨が降る日の文章」と云ふのだつた。ジト／＼降りつづく長

雨は私達の魂にカビを生ぜしめる、夏の夕立は心の沐浴だ。朝の雨、夜の雨、子供の目から溢れ出る涙の雨、讀んで雨の音を遠くなくかしく耳の底に蘇らせる文章、雨をインクにして書いた文章……と丁寧にこちらの狙ひ所を説明して置いたのに、みんなほんとの雨降りの日を書いてしまつた。妹とケンカした子、母に手傳つてお萩をこしらへた子、主婦の友を讀んだ子、窓に凭れて讚美歌二百十六番を唄つた子――。責はこちらにもあるが、要するに主題を把握する力がなかつたのだ。

辛抱して五六篇も讀みつづけていくと、そのどれかに必ずあの「雨が降ります雨が降る、あそびに行きたし傘は無し……」と云ふ白秋の童謡が引用されてあるのには苦笑するほか無い。五年生、ちやないか。

間崎は仕事をきり上げてピアノを弾きに行

かうと思つたが、疲れた時の愚圖々々した氣持にひきずられて、結局またペンを拾ひ上げた。今度は澤山の中からふだんに立派な文章を書く生徒のだけを選んで讀むことにした。いつもはこんな仕事のやり方を自分に禁じてあるのだが――。結局は同じことだつた。誇張した形容、浮き上がった敘述、かうなると巧詐は拙誠に如かずだ。間崎は最後に、その名前を思ひ出すと共に棘のやうなものを胸に感ずる一人の生徒の文章を讀んで、骨が折れるこの仕事をしておひにしようと思へた。五年B組、江波恵子。

「雨が降る日の文章――私にだけ書けさうな氣のする文題だ。考へることも讀み返す事も要らない。私は黙つて私の心にフツフツ浮き上がってくる水泡のやうなものを紙の上に書き現はしなへすればいい。私がこんな文章を書く努めざるチャンピオンであることは私の幸か不幸かは誰も知らないし、どうでもいいことだ。

私には父がない。私がこの學校に差出した戸籍謄本にはハツ私生兄江波恵子と記してある。家事の徳永先生にいつか「私生兄つて何ですか」とお尋ねしたら、暫く考へられて「神様の祝福を受けずにこの世に生れ出た子供の事です」と大變難づかしい大變簡單な御答をなされた。徳永先生は私がその祝福に恵まれない身分であることを御存知なかつたのかも知れない。もし知つて居られたらミス・

ケートがなさるやうに人差指で私の顔のまん中をゆびさして、『それは貴方のやうな方です』と答へられたにちがひない。さうすれば私生兒^{せいじ}つて何の事だか私にもハッキリ納得出来たのではないかしら。

キリストには父がない。マリヤは聖靈に感じておはらみになつた。けれども私の母は……

母は若い時から澤山の男のお友達にたよつて一家の生計を支へて来た。私の父と呼ばれる筈の人もその御友達の一にちがひない。私の生命が、私の父である人が私の母を侮辱することによつてこの世に送り出されたものであるとしても、私は神様を父にもつよりは人間の父をもつ事を欲する。罪なき者石にてこの女をうて。私ほど母を愛し私ほど母を憎む者はない。母はそのことを知つて居る。母は今も美しい。けれども年をとつて身體も顔も肥つて来た。愛か憎か、私がつやうな生々しい感情の鞭に打たれなければ、母はもうどうして生きていけばいいのかわからないほどに弱くなつて居る。

『お母様は幸福だつた事があるの』

『わからない、何が幸福で何が不幸なのかお母様に考へる力がなくなつたの、お母様はお前が傍に居てくれなければこのままぼうとして氣違ひになるんやないかと思ふわ。朝から晩まで誰にもわからない歌をうたつて居るやうな溫順^{なつこ}しい氣違ひにね。……そしたらお前はどうかなるだらうね』

お酒を飲んで居た母はすぐに興奮して泣き出した。そして一年に一ベン遊びにくる外國汽船のキャプテンからもらつた古い葡萄酒をもち出して私に飲ませてくれた。私がお酒のうま味をほんとに知つてゐることを母は氣づかないのだ。

『お母様がそんなになつたら——私だつてお母様みたいに獨立で働いてお母様を大切に養つて上げるわ。お母様がお祖父様にさうして上げたやうに……』

私はその言葉の反應を痛いやうな氣持で母の顔から盗みとらうとして居る。ああ、だけど、母はほんとに弱りきつて居る。

『さうねえ、お前はお母様思ひだから、私が唄きちがひになつてもきつと親切に私の面倒みてくれるだらう。おつくりをすればお前だつて十人並の美人だし結構一人で立つて行けるよ。女が獨立で働くのをかれこれ悪く云ふのは世間の奥様達のひがみだと思ふよ。ねえ、だけどお前は私みたいに肥らないやうに氣をつけたがいい。梯子の上り下りが苦しいし、一寸の物事に驚いて胸がドキドキするからね。田村さんの奥様は毎朝冷水摩擦と體操をなさるんだよ』

それが母の答へだつた。私はまだまだ夢みる女に過ぎないらしい。それから、母も私もだんまりでお酒を飲んだ。暗い海から吹いてくる潮風が濡れタオルのやうに顔の火照りを冷やしてくれた。一匹の黄色い蛾が黒いデー

ブルの面にじつとへばりついて居た。母も私も氣にかかつて、見まいとするほどその不氣味な生物に視線をひきつけられた。まだ見ぬ父のことが鍾でつかれるやうに苦しく考へられてならない。

『お母様、女の幸福つて男の方からで無いといたことが出来ないものなの。女一人だけの幸福つて世の中には無いものなのかしら、……ほんとの事を教へてね』

『お前は時々恐ろしい大人になるのね。學問したお蔭だよ、きつと。お母様にはお前のたづねることがわからないの。世間には私ほど男の御友達を澤山もつた人もないだらうし、また私ほどいつも一人ぼつちの女だつた人もないだらうよ。そのくせ何が幸福で何が不幸だかをちつとも知らずに暮してしまつた私なの。ずつと昔に、思ひ出せないの、夢だつたかも知れないんだよ、お母様にも幸福らしいものが近づいて来た事があつたんだけど、何だかの背中合せに血を流すやうな恐ろしいものが隠れて居さうな氣がして、臆病なお母様は尻込みしてしまつたの、後になつてからも悔む心なんか起らなかった。ただもうああ恐ろしかつた、よかつたと思つただけなの。私はきつとその頃から肥り出したに相違ない。』

お前の學校の先生が仰言るやうにもし天國と云ふものがあつて、そこで神様が『お前は生きて居た時に何をして居た女だ』とたづね

られたら「私は澤山の男の御友達に親切に上げてあげました。私は誰をも欺きませんでした。一人のために一人をおとし入れるやうな罪深い行ひは致しませんでした。出来ない約束はどなたにもした事がございません。私はみな様に公平に親切をつくしました。さうすることが私の生れつきに協つて居たのでございます。だからどなたも私のために争つたり私のために不幸に陥つた方はございません」さう云つて答へようと思ふの。その通りなんだからね。だけどたつた一つ神様に叱られるんぢやないかと思ふことがあるの。それはね、時々一人ぼつちで御室に居ると譯もなしに泣き出してしまふことがあるのよ。何故泣くんだけ、泣く譯なんか少しも無いのに涙がとめどなしに溢れて来て、しまひには聲をたてて泣き出さずに居られなくなるの、身體がこんなに慄へてね。どうしやうも無い。だけれども無しに泣くなんてきつといけない事だと思ふわ。ねえ、お前の考へはどう？　なんだかお母様には、お母様が生れない前にお母様が大人になつてから泣かず居られなくなるやうな原因がつくられて居つたやうな気がするの。そんな事なら誰にもわかりやしない。ねえ、お母様はいけない女？　『知らない。……お母様好きよ』

それが母の姿だつた。感覺と理性を白濁した血の流れの中に喪失してしまつた原始の女。哀れな母。憎い母。私は女學校の二年生

になるまで母に抱かれて寝た。母の温い手が私のお尻を撫でまはした。母が唇を噛んで泣くのも眠つたふりで知つて居た。私の知らない理由で母が泣かなければならないといふ事がどんなに口惜しく悲しかつたかを私は今も忘れない。私の母の悲みの彼方にほんやり「男」を考へた。今も變らない。けれ共また母と抱き合つていろ／＼な御話をするのはこの上ない私達だけの樂みでもあつた。ある夜の寢物語に、私は母から女の身體の祕密についてきかされた。眠れなかつた。涙が出た。けれ共翌朝までには私は女に生れたことに深い意地惡な喜びを感じて居た。私はこの喜びを誰にも氣どられまいと自分に誓つた。私がさうした女であることをハッキリ自覺した時、女に生れたことの喜びが一層深刻なものになつた……

『お前の指、すつかりもう一人前の女だね。お母様の指環をつくりお前に上げよう。きつとよくうつるよ。……お母様は自分が嫌ひぢやない。ないけどお前はお母様とちがつて居る方がいい。私達がこんなに仲好しで居られるのも、私達の氣立がひどくちがつて居るからだと思ふの。もしお前がお母様に似てくれればお母様はもう要らないお母様になる譯だから、お室をきれいに飾つて、御化粧もして、静かに死んでいくわ、ヴェロナールのんで、お前止めやしないね。お前の腕の中に抱いて……』

『ええ、止めやしない。そんな日、だけどくるかしら？　來ても來なくても私達後悔なんかしないと思ふけど。……お母様』

『好きなの』

『お前お母様の姉さんみたいだね、自分でそんな氣がしない？　』

『するわ』

うつろに答へた。母は私の指を幾度も唇に當てた。

母にたつた一ぺん訪れた幸福——それが私の父だつた、なんて考へる權利は私に無い。そんな理想主義は三文小説のハッピーエンドにしか向かない。世間の物事はその逆をいく。私の暗い生甲斐もそこに見出されるのだ。私は男を知りたい。その男を通して私の父を感じたい。父の肌を、父の血の匂ひを、父の口鼻を、父の欲情を——さうすれば私は神の祝福に恵まれない一人の私生兒が何故この世に生れ出たかを正しく知ることが出来るだらう。

母はテーブルにうち伏してうたた寝して居る。慢性疲勞でこの頃は他愛なく眠る。私は窓縁に椅子をよせてひたすらに暗い夜の海を眺めた。海鳴をきいた。あの音の中に一切の祕密がかくされて居さうな氣がする。父、現はれ出でよ！

結論に來た。氣どりの私は、眞理探求に血を流す一使徒としての私を考へる。私が處

女でなくなる黒い一線がひかれる日は案外近いかも知れない。私の名はハツ私生兒江波恵子！

先生、私のわがままなデッサンです。少しはづかしんですけど、でも書きたかつたものですから」

原稿紙五枚にワクを無視した達筆な走り書で認めてあつた。間崎は烈しい衝動に打れた。彼は彼だけに示されたかくも生々しい心の記憶を、女はもちろん男の友人からさへ與へられたことがなかつた。お下げ髪、水兵服——そのポケットにチヨコレットをしのばせた小娘の中にこんな生活があらうとは！間崎は二度繰り返して讀んでから、刺戟された感情の方向に彼の「評」を走り書きした。

「私が要求したものは雨が降る日の文章だったのに、貴女は嵐の日を書き上げた。それは既に書かれてしまつたのだ。私は私が教師であるだけの理由で、かくも苦惱に満たされた懺悔を私の生徒に強いる権利があらうとは思はない。いや、これは私の外交辭令だ。ありのままに云ふと貴女は豚に眞珠を與へた事にならう。私の役目は生徒と云ふ概念を指導することにあつて個々の魂には關りが無い。結局無い。私は白い手の鑄物師だ。型つくりだ。それ以外のものではならない。此の薄弱な犬儒主義は私もまた若いと云ふ理由でともかくも許容されなければならぬ。でないと私は貴女や彼女や彼女タツシユの息づま

るやうな心の花園の匂ひの中に窒息滅亡を餘儀なくせしめられるであらうから。それは私と貴女と、私と彼女との情死を意味する。私はミス・ケートの心臓を擁護するために、も當分臆病者の名に甘んじようではないか。私は多くを云ひすぎた。『吠ゆる犬は強からず』

以下二三の評を書く。江波恵子は自分を強いて信じて居る弱い少女だ。彼女の眼は嘗て多くの封建婦人が犯されて居たつましやかな色盲症を患つて居る。それは、微細な陰影を捕へるには敏感だが肝腎の光は盡く逸してしまふ哀れな不具の網膜だ。現實とは自己の對立的存在では無い。自己の積極的意力が時間と空間に働きかけた場合にのみ吾々の現實は誕生するものであり、江波がみたものは遠い昔に死滅した月世界の觀念的な現實に過ぎぬ。それが如何に美しからうと、その美は結局博物館に保管さるべきものののだ。

江波の第二の誤謬は自分の不幸を此の冷却した客觀世界に依據せしめて居る事にある。それは古風な運命論であり、君はその中で自らを瀕死の白鳥に譬へて悲哀の酒に酔ひ痴れようとして居る。與へられる號令は廻れ右！だ。そして君は一兵卒の四角い素朴な意識をもつて君の人生を踏みなほさなければならぬ。妄言多謝」

間崎は一氣にその評文を書いてしまつた後、寂びしい濁つた氣持にさせられた。人中で調子に乗つて喋り過ぎたり、嘘を吐いたり

した時に感ずる澁い舌觸りな氣持。多分彼は評文の中に辛辣な美辭麗句を織り込んだものに相違ない。だが、いつの場合でも、そんな風の虚偽は、その時偶然に語られたものではなく、彼の心にそれを醸す不純な滓渣が沈澱して居る事實を裏書きするものだから、自分の未熟を鞭つと共にその滓渣を根絶やしする意味で、一度口外した言葉は成可く引つ込めないことに決めて居た。今度も彼は衝氣に満ちた彼の即興的な批評を一字も訂正しまいと意固地に決心した。

——間崎は赴任後間もなく江波恵子の名を知つた。職員室の話題に上る江波は、ひどい我儘者で、よく學用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもつてくる、寄宿生であるにもかかはらず遅刻早引が多い、教師に理窟を言ふ、そのくせ頭は素晴らしくいい、と云つた風な、教師の側からは最も扱い難い生徒の一人であつた。間崎はさうした噂を聞き、また時訓育係の先生に呼び出されて御叱言を食つて居る。大柄な、美貌の本人を見知つてからも、特別な關心をもつ事はなかつたが、ふとした機會で江波との間に個人的な交渉が生じて以來、疲れた時、寂しいとき、江波の姿が雲のやうに心をかげらすのに氣づいて顔を赤くする事が屢々あつた。戀愛だとは思はない。繪でも文學でも人間でも、頽廢的なものに心を引かれる自分の傾向を間崎は平素から極力警戒して居たし、江波に對する關心も、

他の生徒にみられない成熟した一つの性格に對する興味にすぎないものだと思つてゐた。

七月半ばのある日、彼は時間が空いて居たので、雜誌をもつて裏山へ寝轉びに行つた。

熊笹の間の小逕を通つていつもの丘に上り、一本松の下の窪地に腰を下ろして、眩しく光る海を眺め下ろして居ると、ふと附近かで口笛の音が聞えた。ふり向くと彼から三間と離れてない別の窪地に、江波恵子が、兩手を頭の下にあてて、あけひろげな形で伸々と寝こんで居た。胸に赤い表紙の本をのせ、眼をつぶつて口笛を吹いて居る。間崎は驚くと共に、江波の地面に委せきつたやうな姿態に反射的な恥づかしさを覺えた。彼は近づいて聲をかけた。

「どうしたんだ、江波さん」

「たうとうみつかつたわ、足音が聞えた時先生かも知れないと思ひましたの」

江波は起き上がつて彼の顔を見上げ、惡戯を企てた子供のやうに面白さうに笑つた。斯うして見るとほんの無邪氣な少女の顔でしかない。

「頭が痛いからこの時間だけ先生に休ませていただきましたの」

「君は我儘が通つていいんだね。何の本だ……」

間崎はぶつきら棒に云つて江波の傍に腰を下ろした。空も海も青く晴れ渡つて誰とも仲よく出来るすがすがしい氣持だつた。本は

フランスの譯詩集だつた。

「先生お上りになる……」

ポケットから銀紙に包んだチヨコレートをつかみ出した。

「いろんなものを持つてるんだな。いただかう」

ゆつくり包紙をむいて黒い塊を口に入れた。同じ甘さが二人の舌の上で溶けるのが感じられた。間崎は豊かに肉づいた白い艶のいい横顔をこたはりなくちつと眺め下ろした。チヨコレートを含んでボツンとふくれた頬だけ見て居ても、眺め飽きない清らかな美しさが溢れ出てくる。江波は、片方の耳に重く被さつた髪の毛を、グイと頭を強く振つて拂ひ除け、それと共に間崎の顔を無邪氣に眺め返した。自然の微笑が目の片隅から湧いた。

「君は斯うして居ると素直ないい人なんだがね。何だつて時々あんな桁はづれな事をやつて職員室に呼び出されるんだかなあ」

「私にもわからないんです。温順しい私と悪い心をもつた私とが身體の中に別々に住んで居て、私はそのどちらかの奴隸にさせられてしまふんです。温順しい方の私だつてほんと

の私ぢやないやうな氣がするんです。私の顔、ウンと綺麗に見える時と醜い恐ろしい顔に見える時とあるつて御友達が云ひます。どちの顔も私自分の意志でつくる事は出来な

いんです。いつかミス・ケートが倫理の御話の中でお

互に喰ひ合ふ二匹の蛇はしまひにどうなるかつてお尋ねになりましたけど、私自分の事を考へると、その不氣味な嘘へ話が思ひ出されてなりません。人間にすると、それは自分が生きて行くために自分の生命を少しづつ食べ

て行くつて云ふことになるんでせう」
他人の事でもあるやうに屈託の無い顔で語つて居たが、やはらかい言葉の底を一筋の黒い絲のやうなものがビーンと貫いて居るのが感ぜられた。間崎は靜に湧き上る興奮を抑へつけて答へた。

「君の考へ方は間違つてないと思ふ。我々の生命は原始の土からつくられる。所で人間だけがもつて居る最高の精神が、その土の匂ひにまみれた生命を少しづつ喰ひ減らして行く、それが各個人の人生になるんだと思ふ」

「――最高の精神は何から生れるんでせう」
「それは土でつくられた荒僻りな生命の中か

ら」
「可笑しいわ。そんな矛盾した關係考へられないぢやありませんか」

「考へるんぢやないんだ、それが事實であることを正しく認めることが必要なんだ」

「認めてもいいわ。だけど若し、私が普通の人と反對に、その泥まみれな生命の方が最高の精神を喰ひ物にして生きて行く人間だつたら、自分が生んだ赤ん坊を食べなきゃ生きていかれない母親。何だか恐ろしいわ」

間崎は笑つて居る江波の顔から自分の目玉

の中に何か飛びこんだやうな気がした。

「さういふ人は、不幸だと云ふより仕方がない」

「ちや私不幸だわ」

その瞬間、突然な可笑しさがこみ上げて、

二人とも聲を上げて笑ひ出した。

漁船を曳航する發動機船の爆音が、口の中にふくんだやうなやはらかい連續音を港の眠った空氣の中に響かせた。一つ一つの音が小さい輪になつて空に吹き上げられ、それが緑色の棒を寝かせたやうな半島の突端までユラユラと波紋をひろげて、うすれて、消える。

目を細めて海面を少しづつ辿つて行くと、太陽の光で白くキラキラ光つて居る沖に近い區域を一二寸外づれたあたりに、五六匹の蟲が行列したやうな漁船の一群が発見された。混み入つた地圖の中から自分の探がす小都會を発見したやうな、ただそれだけで譯もなしに嬉しい氣持ちにさせられる事だつた。それらの漁船には赤銅色の皮膚をした漁師達がつて居り、漁師達のお上さんや子供等は濱邊を歩いて居り、彼等は愛したり喧嘩したり、死んだり生れたり——そんな風に空想をひろげて行くと、日光と緑の氾濫した平明な港の全景が、著しく汎神論的な氣分に富んだ一枚の厚ぼつたい畫面にみえるのであつた。

岸下から微風が吹き上げて來た。少女の清らかな匂ひが薄い網のやうに間崎の顔を包んだ。

「君が女學生だなんて、可笑しな事に思はれる」

「さうかしら。先生だけがわざとさう思ふんぢやなくつて、それとも私が先生だけにさう見せかけるのかしら。私は、いえ私達はまだ先生が好きなんです。こなたの談話會の時間に嶋田先生が御休みになつたので、私達だけで大變な談話會をやつてしまつたの、田村さんが議長で、好きな先生の無記名投票をやつたんです。先生が一番、二番が橋本先生、三番がミス・ケート。私誰に投票したか先生にわかる？」

「僕に。だつて君は今先生好きだつて云つたもの」

「ちがひました。私橋本先生を書きました。先生が一番になることわかつてましたから書きたくなかつたんです。ちや何故私が橋本先生に投票したのかわかりますか」

「なんだ、僕の方が生徒にされちやつたな。——わからんね」

間崎は自分の表情を読みわけようとする江波の視線を、こちらも目の光を強くして、途中で受け止めようとしたが、その前に赤くなつてしまつた。

「先生わかつてらつしやるんだわ。でも私云ひますわ。私先生が橋本先生を御好きな事わかつてましたから先生のために橋本先生に投票したんです」

「好きだつて——別に嫌ふ理由がないぢやな

いか。生徒の間にそんな噂がたつてゐるのかね」

「噂なんかありません。けれど先生と橋本先生とが現在親密にして居られなくともお互にお好きでいらつしやるんだと云ふ事はつきり感じてる人が二三人はあると思ひます。ほんと過ぎる事は口へ出すのが恐ろしいやうな氣がして決して噂になんかならないものですわ」

「誰だね、その二三人と云ふのは」

間崎の語氣は荒かつた。

「先生をいぢばいに好きな二三の生徒達」
「不愉快だなあ。僕は昔つから自分の妹でもそんな女らしい頭の働かせ方は大嫌ひなんだがな」

「ごめんなさい」

江波は黒い線で中斷されたやうなチグハグな笑ひを間崎の顔に浴びせかけて、海に向いた。そしてかすれた口笛の眞似を始めた。無邪氣とも太々しいとも、そのどちらかに決めようとするばかりでそれが嘘になる紙一重の危険なスタイルを易々と自分のものにして居る不思議な少女だつた。どんな大人の言葉を語つてもしつくり身について居る代り、自分の立場と云ふものを恐ろしいほどに持たない、従つて彼女の語る言葉・思想は惡靈のやうに黒い翼をはたかせて大氣の中を浮遊して死滅する。

間崎を焦立たせた話題の橋本先生と云ふの

は、彼と同期に赴任した女子大出の若い女教員で、地歴を擔當し、現在含監を勤めて居たが、洗煉された容姿と進歩的な思想とで、上級生から殊に信頼をかけられて居る氣鋭の人だつた。間崎も他の同僚に對する場合とは異つた本質的な好意を遠くから寄せて居たが、職員室風な世間話以外には私的な會話を交へた事が無く、またさうした機會をもちたいと望むこともなかつた。

ある日曜日、朝からどしやぶりの雨だつた。宿直に當つて居た間崎は、室の中が鬱陶しいので、窓際に机をもち出して都會に住んで居る友達に用事の無い長い手紙を認めてゐた。其處へ十一時の郵便配達が來た。宿直員は、その日に受けた郵便物を種別分けに日誌に記載し、名宛の先生達の机上にそれを配布して置くだけの責務がある。間崎が受けとつた一抱への郵便物の中に、橋本スミ先生宛の小包が交じつて居た。包紙が雨に濡れて破け、中身の木の表題がスグ讀めるやうになつて居た。社會主義に關する祕密出版物らしかつた。間崎は、そんな本を讀む友人を二三人もつて居たから格別驚きはしなかつたが、學校宛に送らせるのはいけないと思つて、その小包を新聞紙に包み、紐でしばり、中に「小生が宿直で、小生が受けとりました。即時御届けします。一日一善」と書いた自分の名刺を入れて、當番の正直な老僕に橋本先生の下宿先へもたせてやつた。三十分ばかり経つと

老僕が、眞赤な林檎を二個もらつて歸つて來た。

「御親切に有難うございましたつて、これお上り下さいつてよかったです」

「さうか。——お前に一つやる」

翌朝、橋本先生は何時もと變り無い落ちついた態度で、廊下で會つた間崎に朝の挨拶を述べた。だが、その日もその翌日も小包の話には一言も觸れなかつた。林檎二個でおしまひのつもりかも知れないし、或は口へ出さないほど感謝の心もちは深いのかも知れなかつた。

いま一つ橋本先生に關聯した出來事があつた。學校の特色ある施設の一つに、クラスポストと云ふのがあり、これは上級の各教室に赤塗の投書箱を備へ附けて、生徒が隨意に修身倫理の疑問を紙片に記して投書する。ポストは隔週土曜日毎に開かれ、集つた投書は級主任、生徒監、ミス・ケート立會の下に取捨選擇され、入選の分は一旦學校で設定してある系統的な訓育方針の各項目にあてはめた後、逐條審議して解答を決定する、級主任がその解答を生徒に傳達する、云はば婦人雜誌等にある身の相相談のやうな仕組のものであつたが、間崎は最初から赤ポストの教育的効果については疑問を抱いて居た。楽しい盛りが生徒達にさうさうつきつめた倫理上の問題がある譯はなし、勢ひ他人の中傷、際どい遊戯的な性質の質問、單純な惡戯等を書きこん

だ投書が多くなり、それに對する解答も委員の會議で作製するのだから、稀にいい質問があつても、親切味の乏しいアカデミックなものになつてしまふ。間崎が受け持つて居る四年B組の投書内容を二二例示すると、

「両親が争ひをして離縁することになるとします。父が悪いのです。けれども母と一緒に家を出ると生活して行くことが出来ません。子供はどうしたらいいでせう。暨明な先生の御教を乞ひます。近所の方の身の上について——」

「暴漢に襲はれて貞操をふみにじられようとした場合、生命を捨てても、戰ふ可きでせうか。それとも生命を守つた方がいいでせうか」

「間崎先生はいつ御結婚なさいますか。理想の婦人は？ 私共はみんなそれを知りたがつて居ります。X子」

「生徒と先生の戀愛は悪いものでせうか。先生同士の戀愛はどうでせう」

「お金や學用品を借りて返さない方がありません。先生から一般に御注意下さいませ」

委員會は學長室で開かれる。ミス・ケートが正面の肘掛椅子に座し、右わきに投書を讀み上げる役の教務主任が控へ、以下係りの職員達が長テーブルの兩側に向ひ合つて並ぶ。みんなの前にはコーヒータ碗とノートが置かれてある。議事が大半片づいて、後は二三の割合に重要な問題が残されて居るばかり。誰

の顔にも屈託の色が現はれて居た。

「この問題は二三年前にも一度出された事があつて、その時も解決がつかないで有耶無耶に潰されてしまひました。困つた問題です」

教務主任の長野先生は、コーヒーを好まないで角砂糖だけ頬張りながら、銀縁の眼鏡越しにみんなの顔を穏やかに眺めまはした。

もう餘程の年配で、頭がきれいに充げ上り、血色のいつつやつやした童顔には懺悔と感謝の生涯を経た人の能面のやうに脱俗した表情が豊かに漂つてゐた。今も「困つた」とは云ひながら、實は彼が平生親しくして居る人々と一室に會し、打ちつけて、高尚な問題を論議することの樂みを味つて居ると云つた方が當つてゐよう。

「神と天皇とは、どちらが御豪い方なのか。はつきり教へて下さい」

この問題だ。當惑したやうな薄笑ひを浮べて、スプーンを笏のやうに片手に構へて居るミス・ケートには、考へるまでも無い、自明の問題であることは明かだが、而し彼女の神に託された使命は、彼女の生徒達を立派な米國婦人に仕立てることでは無く、日本の若い淑女を養成することにあると云ふ曇りの無い教育的信念を糊塗し放擲しない限りは、永遠に當惑の微笑を拭ひ消すことが出来ない難問題である。

「困りましたね。どなたか解決して下さい」

ば、私、テニソンの立派な詩集をさし上げて

もよろしいのです。ハ、ハ、ハ、ハ……」

ミス・ケートは身體に似合ない細い綺麗な聲をたてて笑つた。間崎は問題の抽象性に興味を感じなかつたので、テーブルに飾られた花を眺めたり、ポケット日記の附録について居るスポーツの世界記録表を讀んだりして居たが、時間が長引くのいらいらして、不意に立ち上がつて發言した。

「これは學校の組織の上から考へても答へられない問題だと思ひます。また答へる必要の無い問題だと思ひます。その理由は、神と皇帝の優劣問題などは、生徒が是非知らなければならぬ切實な問題ではないからです。切實な要求がない所にむやみな知識を注入するのは結局生徒の純真な頭腦をすれつからしめて先へ伸びる力を稀薄にする恐れがあります。一般にこの問題に限らずクラスポストの投書は遊戲化したものが多いやうに感ぜられますから、そんなのはどしどしオミットして答へない方がよいではないかと思ひます。生徒には、貴女がたがほんたうに知りたい要求をもつて考へない方がいと露骨に云つてきかせるのです。人間は、大人の我々でも、極く僅かの事を正しく知つて居りさへすれば、大して誤りの無い生活をして行けるのではないかと思ひます。教育者としての私共の使命も、既に考へられた概念を生徒に授けると共に、否それよりは寧ろ、自分で物を考へる力を生徒に培はせることが大切なのだと思います

す。地均しをする。私共の役目はそれで盡きて居ります。その上に家を建てるのは生徒自身のなす可き仕事であつて、この權限を犯す危険は教育者の殊につつしまなければならぬい事だと信ずるのであります。殊に問題が抽象的であり、十分考へつくされたと云ひ得ないやうな場合には、尙更この或る意味では消極的に思はれる立場を固守する必要があるだらうと思ひます」

それは平素から彼の胸に熟して居た信念であつた。

「おお、大變立派です。私賛成します。私共の生徒はソフィストであつてはなりません。やさしい明るいムスメを作りませう。少し考へて澤山動く事は若い人達だけに與へられた特權です。それを尊く考へませう。皆さんはどうですか」

ミス・ケートは口を大きく引き結んで傾くやうに頷く動作によつて、間崎の主張に本質的な共鳴を感じた様子を明らかに示した。所が、間崎の方ではかへつて自分のお喋りが豫めミス・ケートの博大な共鳴を期待してなされたかのやうな疾しさを覺えた。

「やはり女の子はそんな難づかしい事を考へるよりも家事やお料理をみっちり習つた方が天分に合つてゐるのでございませうね」

大政所と云ふニクネームのある古參の山形先生だ。末の嬢ちゃんが肺炎を患つて居るので早く會議をすませて歸宅を急がれて居る

15 若い人

此為试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com